玄遠俳句　4月号

草萌ゆる　　真城　薗郷

下萌をいつくしむ雨柔らかに
下萌や久々の雨至福とす
下萌に句碑はそばだつ如くあり
いしぶみに留む古城址草萌ゆる
豊後路の下萌しるき仏みち

梅見行　　小島　小汀

城の道梅見の人等登り来る
天指して咲く白梅の清々し
紅梅の微風にゆれて愛らしき
梅林の広し若木も老木も
天守閣視線を下へしだれ梅

卒　業　　早村　春鶴

卒園の児のハイタッチたくましく
園長にハイタッチして卒園す
雨止んで畑打つ姿老農夫
耕すや女手一人耕耘機
春雨の午後は近場の温泉の宿へ

奈　良　　一谷　春窓

手に触るゝ古代の柱春日影
五重塔写して池の水ぬるむ
金堂を出づれば大和涅槃西風
咲く梅の遅速愛しむ一ト日かな
大地震春の悪夢と思ひけり

朝　茶　　武部　春浦

背をまるめ朝茶のぬくさ抱え込む
カリコリとなまこの寡黙食われをり
春寒しか細き音立つる
ストーブを消して一日の終わりけり
鶯の一羽目白に混じりけり

春の雪　　東　素子

春の雪街の喧騒消しにけり
寂寥や紅一点の落ち椿
春の凍墨磨る音に響きあり
ティータイム春の句口に転がして
薄みどり重ねてつつみ蕗の薹

春炬燵　　白原　博泉

フリージア風に吹かれて花盛り
春の蚊の影薄ければ見失ふ
梅林の奥より猫の走り来る
春の鹿夕陽の中を跳ね廻る
春炬燵読みたき本を重ね置く

草芽吹く　　山本　春英

草芽吹く園に人居り子鹿居り
議論めく国会放送春の雷
ほろ苦き牡蛎の一品のれん街
春めくや親子は何処へ行くかしら
春寒し友を見舞ひし月の道

春さむし　　久保　春玉

初午や伏見稲荷のご縁日
首に掛けて小さき手袋雪あそび
サフランの鉢の小さし春の雪
お点前の静かに梅の庭を前
春寒し咳く母の背ナ撫でてやる

寒　椿　　川村　春節

じっと目をこらし生ける寒椿
湯豆腐のかたこと煮立ち老夫婦
福豆を帽子で受ける笑顔かな
失いて分かる元気や宵戎
春愁や莫山の絵と共に居り

玄遠俳句　5月号

春の泥　真城　藺郷

つなぎたる手を春泥に来てほどく
春泥の耳門へ渡す歩板かな
塾の子の春泥を来し靴並ぶ
陶土搗く水車の零す水温む
客土入れ花壇手入れや燕来る

踏　青　小島　小汀

春暁や津波に追われ目を覚す
くっきりと空に泰山木の花
踏みしめる土柔らかし野草また
菜の花や眼黄色く染まりけり
水満ちて池を巡らす菖蒲の芽

夕　桜　早村　春鶴

廃校の校庭明るき夕桜
一面の辛夷に埋もる安寿塚
百姓のこと知らぬまゝ種選び
満開の枝垂れ桜を傘にして
老妻の無口のまゝに花の下

猫の死　武部　春浦

梅散るやただ居るだけの猫おらず
木瓜の花薄衣着せ猫の葬
雛の日老いたる猫の逝きにけり
雛の日猫の遺品も埋めたり
猫眠る土を濡らして春の雨

大震災　東　素子

堪えてゐし子等の瞳の花明り
花の下集ふ日ありや被災びと
地震予報に身構えてをり花の舞ふ
桜咲く地霊あれから震災禍
花の下魔の手鎮めん原発禍

春の昼　白原　博泉

紅梅の雨に風情の屋敷町
春の夢見知らぬ路地へ迷い込む
空を奪ふ木蓮の花さかりなり
小綬鶏に呼ばれし宿の昼餉かな
連翹は枝の長さを競ひをり

春　風　山本　春英

一群の雁の旅立ち空高く
参道の足もと揺るる春の風
花びらのころころ走る風ありし
老夫妻人波遠く花を見る
携帯で居場所確かめ花見客

お水取り　久保　春玉

修二会今僧の走りし下駄の音
お水取りの僧は脛出しお松明
夕映えの母待つ子等のシャボン玉
春めくや朝餉の膳のしじみ汁
お彼岸を過ぎても寒し毘沙門堂

春の風　川村　春

初午や伏見稲荷のご縁日
首に掛けて小さき手袋雪あそび
サフランの鉢の小さし春の雪
お点前の静かに梅の庭を前
春寒し咳く母の背ナ撫でてやる

玄遠俳句　6月号

藤　棚　　真城　藺郷

鋤き込まる大地の糧のげんげかな
藤棚の明暗花房垂れ揃う
藤棚の木洩日いつも揺れてをり
藤棚の早朝すでに虻翅音
六地蔵親しみ撫でて春惜しむ

花爛漫　　小島　小汀

花爛漫迎えし夫の三回忌
夕日まだ高く若葉の陽に映える
春の雲流れクレーンの天を突く
鳥渡る影の速さや春落葉
紫の小花つけあり春の草

若　葉　　早村　春鶴

それぞれの樹々の色変へ新涼に
風止んでいつしか音の若葉雨
賑やかに田に人集ひ里若葉
寺跡の小径消へをり竹落葉
身も心共に明るき更衣

春　雷　　一谷　春窓

春雷や將棋倒しの駐輪場
珍しき花の講釈昼下がり
幟立つ家の泣き声笑ひ声
土手に足遊ばせゐたり青田風
新緑や浪花へ向かふ高速道

新　緑　　東　素子

新緑に微光のおどる窓の外
やわやわの新緑を打つ強風雨
風を待つ日本タンポポわたげ照り
青葉風言霊の海深かりし
空ひろし白きブラウス衣更へ

愛猫さらば　　武部　春浦

空っぽの猫の寝ぐらよ春寒し
葬りし猫の墓なり春すみれ
桜見に今年は猫の影つれて
サーフィンの波一筋や初夏の海
外洋の波のかがやき豆の花

蝌　蚪　　白原　博泉

踊り出す蝌蚪の一つを見てをりぬ
ふたつ目の路地を駆け抜け春の雨
公園のベンチに届く藤白し
人力車春の光を撥ね返し
風光る街を観光人力車

花　筏　　久保　春玉

街路樹の辛夷の花に街暮るゝ
長閑さや母のくれたる句集読み
気を付けの姿勢くずさず新入生
花筏淀に残して暮れ急ぐ
貴船道宿の女将の春日傘

音楽会　　山本　春英

病む友の経過良好梅雨晴るゝ
夜想曲で終りし会や新樹風
母の日の三人姉妹コンサート
燕来ぬ巣はそのままに古館
青嵐連弾曲の息合ふて

初　鰹　　川村　春節

たんぽぽを踏まず遠回りして帰る
送りたるあとの静寂や雛流し
古館ロマン語らず花水木
弾みたる声の電話や初鰹
出勤の傘華やぎぬ梅雨の街

玄遠俳句　7月号

実梅もぐ　　真城　藺郷

目を据ゑて葉裏余さず実梅もぐ
梯子には登らぬ自重実梅もぐ
茸生え庭の一隅梅雨暗し
樹々茂り梅雨の暗さの覆ふ庭
水鶏啼く古刹の池面梅雨深し

藤の花　　小島　小汀

潮風に藤の花房揺れやまず
新緑の湧き立つ御陵一巡り
旧灯台見渡す丘の樟若葉
新築の家高々と鯉幟
皮脱いで若竹空へ青極む

万　緑　　早村　春鶴

万緑にすはる、如く径の消へ
木洩れ日に著莪の白さのきわ立てり
草を刈る満身匂ひ持ち帰る
老農婦暑さ喜こぶ顔をして
貰ひ手のなき餘り苗田の隅へ

花　桐　　一谷　春窓

五月女の泥を眉間に茶を啜る
やはらかき駒のあごひげ若葉風
定年の教師夫婦の草むしり
花桐や造り酒屋の深庇
湖わたる凡鐘かすか夏座敷

大震災　　東　素子

余震尚つづく日々なり柿の花
液状化してもふるさと花菖蒲
放射線気遣い庭の蕗採れず
梅雨晴れ間十薬の匂ひはこび来し
生ビール梅雨の暑さを吹きとばし

星月夜　　武部　春浦

親と子の縁の短き猫の梅雨
つるバラの軒より延びて星月夜
緑立つ日向日陰の高さあり
蜘蛛の囲に青葉くるくるくるくると
庭の隅今年も同じ蛙とも

鯉のぼり　　久保　春玉

菖蒲の葉孫の頭に結びけり
鯉のぼり親子三尾の風ならむ
藤棚を仰げば花の大日傘
樟脳のほのかな匂ひ更衣
ひと刻を孫とあやとり梅雨の午後

梅雨の傘　　山本　春英

梅雨の傘かわいい絵柄の保育の子
菜の花や野良猫を黄に包み込み
愛猫を探しあぐねて梅雨に入る
街若葉鳥の智慧のゴミあさり
梅雨晴間電車ゴッコの保育園

初浴衣　　川村　春節

滅入る気を追い出して着る初浴衣
秋風を一人占めする宿の椅子
箸置きの柄さまざまや秋の旅
日暮れても帰る家あり草紅葉
エスカレーター長ければ汗引いてゆく

玄遠俳句　8月号

汗

真城　藺郷

ささやかな節電の汗なりしかな
言ひ訳のならぬ遅参の汗なりし
汗の顔見て納得の一事あり
汗止めの鉢巻きしかとヘルメット
熱中症防ぐ水飲み汗流す

入梅

小島　小汀

入梅や恵みの雨となることを
山梔子の花の香りを一つ摘む
梅雨晴れの入り日眞赤に炎える空
南天の高く蕾の群れそよぐ
田の水の張られて早も鳴く蛙

大夕立

早村　春鶴

大夕立来る気配して風一陣
あの雲の下は夕立野良急ぐ
雷鳴の轟き雨脚強めけり
顔の汗拭く手も玉の汗流る
野良仕事終へるを待たず缶ビール

七変化

一谷　春窓

あどけなき願ひの糸を結びけり
木漏れ日や一会の蝶の解れたがふ
七変化雨後の日の色陽の匂ひ
水打てば子猫飛び出す木陰かな
病室の夕餉の時刻暮れ急ぐ

梅雨明け

東　素子

梅雨明けの空に行き交ふ雲は夏
国会の迷走議会夏来たる
緑蔭を抜けたる風のやはらかし
風さやか栗の花の香ありし丘
貴重なる魚育ちゐる夏の川

梅雨

武部　春浦

公園の遊具動かず梅雨に入る
引き抜けば夏草太き蛙跳ぶ
梅雨の風海は心の色をして
梅雨の風マリア・カラスのバラ咲きし
デコポンと豚マンと交換したる人

滴り

白原　博泉

青鷺の降り立つ川の流れかな
滴りの時を刻みし如く落つ
夏蝶や我の心をもて遊ぶ
坂上りバスの道ゆく鉄線花
夏ぐみを祖先の墓に手向けをり

十薬の花

久保　春玉

梅雨暗し十薬の花十文字
廃屋の庭の十薬花白し
梅雨の午後読みかけの本伏せてみて
朝顔の花色いくつ種袋
梅雨寒むや赤いくつした履いてみる

銀座

山本　春英

先輩の個展銀座の夏炎暑
被災児へ絵本選びや梅雨に入る
あれこれの露天囲みて五月雨るゝ
稽古の子素足並べて薄暑かな
愛猫のお礼まいりは梅雨明けに

祇園まつり

川村　春節

京暑し祇園まつりのチンチキリン
片陰に祇園まつりを見送りぬ
祇園会をそびらに京の日傘かな
節電や団扇波打つ朝の駅
魁皇の終の夏場所堂々と

玄遠俳句　9月号

夜の秋　真城　藺郷

推敲の一句入魂夜の秋
星空と対話はじまる夜の秋
書を伏せてしばし星見る夜の秋
大川に船団を組み渡御を待つ
渡御を待ちきれずどんどこ舟燥ぐ

青　嵐　小島　小汀

若狭路の山青嵐海はるか
名水の流るる山路濃紫陽花
舟を漕ぎ出して水都の夏祭
身を包む端居の風の心地よさ
彩雲の西の明るさ青田風

星月夜　早村　春鶴

山里は頭上のみなり星月夜
いかづちのしきりなる夜雨を待つ
ぎらぎらがきらきらとなる秋の空
園児等の七夕飾り読めぬ文字
掃苔や江戸期の文字のかすかなる

夏の名残り　一谷　春窓

一ト仕草遅るるも佳し盆踊り
去る友の名残り惜しさや夏帽子
参道の奥へ奥へと蝉時雨
赤蜻蛉貨車の線路の行き止まり
マネキンのやうにはいかぬ秋の服

白　桃　東　素子

紫蘇摘みに行けばバッタの群れ居たり
白桃の香りに夜の闇深し
空海の奥義艶めき萩白し
熱こもる硯を洗う日なりけり
負の遺産原発までも秋に入る

蝉時雨　武部　春浦

蝉の声今日の命のか細さよ
かき氷食べませんかと蝉時雨
蝉しぐれ破調の声は何蝉ぞ
空蝉のしかとかかえし幹太し
緑陰に生まれし風のにほひかな

蓮の花　白原　博泉

蓮の花旦にひとつふたつかな
含羞草ひとり佇み試しけり
低く飛ぶ蝉の羽音や庭静寂
六甲のニッコウキスゲ咲き誇る
水打って京の町家の涼しげに

文春展　久保　春玉

クーラーや「桜」大作背に挨拶
大字書でまとめて涼し銀座展
師の個展祝うピンクの胡蝶蘭
ボール持つ手の日焼けして甲子園
投げ切った安堵の汗を拭いてをり

八　月　山本　春英

百日紅揺るる被爆の詩を読める
敗戦の汗と涙の球児かな
満身の鳴き声太し今朝の蝉
闇に咲く花の幾十螢飛ぶ
ほうたるの群れをはなれし一つかな

踊　り　川村　春節

踊りつゝかざす団扇の会釈かな
踊りの輪近づく人の美しや
新盆や亡姉に捧げし百日紅
蝉しぐれ祢宜の祝詞もかき消され
一人居てかなかなの声じっと聞く

生きる　佐藤　雲渓

天の川急ぎ逝きたる友を送る
緑陰や昭和平成生きて来し
緑陰は妻と二人の散歩道
共に老ゆ妻と二人の初の秋
蝉の亡骸翅の艶まだ失わず

花の夜　田中由つ子

花の夜のアイネクライネナハトムジーク
またたび算ながれ算解く茨の芽
蕗味噌や今日命日と思い出し
ポケットの拳を緩め四月馬鹿
固まって新入社員の昼休み

玄遠俳句　10月号

門火焚く　　真城　藺郷

ふる里の人の消息聞く展墓
父母の迷はずに来よ門火焚く
正面に大文字燃ゆ加茂堤
真新し寄進提灯地蔵盆
辻地蔵盆の飾りが道狭め

空　蝉　　小島　小汀

高声に桜大樹を蝉渡る
空蝉のなきがら軽くありしこと
片陰の風のやさしさ受けとめし
遠花火今たけなわや音弾く
揚花火空を茜に金糸散る

九月来る　　早村　春鶴

泣き蟲が満面の笑み九月来る
園児等のたくましき顔九月来る
老妻の日記書き足す夜長かな
対岸に秋の出水の跡ありぬ
吾が影を従へ名月仰ぎ見る

根深汁　　一谷　春窓

言の葉をぽつりとはさみ根深汁
不器用な自作の花瓶野菊挿す
満月や姥捨山を通り過ぐ
紅唇の濡れたるごとき紅葉道
生命線紫蘇揉みし掌を開き見る

鉦　叩　　東　素子

とんぼ釣る思い出自慢酒を酌む
とんぼ追ふ武蔵野もなし秋茜
月を待つしじま確かに鉦叩
筋一本風のそよぎに郁子熟るゝ
発掘の秋陽吸い込む朱の漆器

蝉しぐれ　　武部　春浦

ジャクジャクジャク寂滅無常蝉しぐれ
鳴き止めばこの世の終り蝉鳴けり
大花火見せたき人の遠くあり
人影の手をつなぎつゝ花火の夜
夏木立青に染めたる空があり

金亀子　　白原　博泉

草笛や道に迷ひし夢ばかり
草苺ひそかに育ちゐるごとし
カーテンを掴みて風の金亀子
黒百合は恋の花なり峠茶屋
蚊を連れてバスに乗りこむ人のあり

百日紅　　久保　春玉

迎え火や夫との日々を想ひつゝ
玄関の靴並べゐる盆の客
そそくさと茶飲みて帰る盆の僧
くり言のつい口に出る法師蝉
無駄足となりしは言はず百日紅

月冴ゆる　　山本　春英

ゆるゆると旅客機降りる月今宵
名月の生駒より出て飛機降下
月の句はむづかしいです月今宵
「なでしこ」が刺戟夜学の筆を執る
雑音をラジオは流し筆の秋

初　盆　　川村　春節

思い出は良き事のみの初の盆
三人の初盆祭る暑さかな
初盆や赤き鼻緒の姉の下駄
一族の三代集ひ盆祭る
脚長き児は三代目盆祭

みのむし　　田中由つ子

病葉を揺らして亀の浮かびかり
夫婦になりそこねし二人新豆腐
嘘つきが好きで嫌ひで火の恋し
深爪はいつものことよ根深汁
蓑虫揺るゝ感謝の気持ちの足りぬ

玄遠俳句　11月号

望の月　真城　藺郷

点在の漁火の澄む秋来る
雲切れてやうやく望の月を得し
ビル谷間にてふる里の月を恋ふ
茶事すすみ立待月の露地明り
万の露万の朝日の玉となる

月　小島　小汀

空深く動かぬ月となってゐし
月光に一草一花つまびらか
月高し被災地へ発つボランティア
どこまでもムーンライトのとどく街
天窓に月現われて居待月

運動会　早村　春鶴

ビリの子に拍手暖か運動会
園児より親張り切りし運動会
運動会カメラも走る園児追ふ
又増へし草の錦の休耕田
掌にとれば青きも交じる今年米

初冬　一谷　春窓

散り急ぐなかれ信濃の紅葉山
新酒酌む変はりゆく世に身を委ね
蕎麦買ふて木の香匂へる家に入る
初霜や使はぬ井戸の水光る
月冴ゆる空へ放ちて槌の音

黒蝶　東　素子

蟬喰う大蟷螂の大団円
泥水に秋の黒蝶遊びをり
径みちにいろ濃い風の金木犀
椿の実爆ぜて踏まれて連なりし
落葉掃き焚火火の粉の恋しけれ

音澄む　武部　春浦

朝顔のタイルの壁をよじ登り
柄物のステテコ流行る秋暑し
風立ちて子猫はどこへ行ったやら
米とぎて音の澄んだる夕べかな
帰り来しわが故里は虫の秋

露草　白原　博泉

虫の声止みし廊下の暗さかな
露草や物忘れして振り返る
赤蜻蛉分校に来て日暮れけり
快よき水車のきしむ庭を抜け
秋日傘手すりに掛けてバス発車

彼岸花　久保　春玉

コスモスの彩を寄せ合ふ風邪のあり
寄り添って炎軍団彼岸花
寄り会ふて太鼓の稽古秋まつり
湯上がりの鏡に秋の女振り
吉野葛すすりて秋の風邪らしく

思い出　川村　春節

マッチ箱を繋いだような汽車の秋
ゴットンゴットン秋の列車が走ります
小さな花を一杯つけた蕎麦の花
暮れて行く秋伊吹山の麓の村
思い出は母の実家の高台の秋

玄遠俳句　12月号

産土の秋　　真城　藺郷

産土の献灯淡く秋惜しむ
産土はわがまほろばよ秋高し
秋の蝶孤影曳きつつ杜に入る
磐座のほとりしきりに木の実落つ
雷裂きし神木の立つ神の留守

秋　風　　小島　小汀

秋風や旅立つ心せかさるる
海に湧き空をうづめて鰯雲
親しげに挨拶交す萩の寺
熟睡の朝の目ざめや秋時雨
球根の遅しようやく秋芽出づ

冬　耕　　早村　春鶴

冬耕の終へぬ田あり休耕田
植えるものなき冬耕の粗耕し
植木鉢割るゝ音して神渡し
立冬と思へぬ陽気雨上る
大津波田に船残し冬に入る

深秋の信濃　　一谷　春窓

風吹かば稲豊穣の海なりし
尋ねゆく木曽谷歴史いわし雲
村祭ふるまひ汁を並び待つ
たちこめる湖の冬霧鶏の声
寒蘭の部屋駆けまわる孫二人

冬に入る　　東　素子

夫の今日ほろ酔の帰路冬迎ふ
圓生の「雁風呂」聴きつ冬に入る
儚げに冬の朝虹かいま見し
冬野菜旨味引き出す吾が厨
白菜の白さ芯まで窮まれり

秋　祭　　武部　春浦

秋祭り我関せずと猫通る
時雨来て少し乱れし秋祭
空高く真珠一粒秋の昼
うろこ雲残る光を運びをり
秋深し星に拳を突き上げる

般若寺　　白原　博泉

石仏に触れて離れて秋桜
コスモスの花を逃がさず蜂の秋
コスモスを遊ばせ文珠大菩薩
コスモスを遊ばせ胎内仏三尊
秋日傘さして見てゐる牛舎かな

秋時雨　　久保　春玉

髪染めて乾かしてをり金木犀
こぼれ落つ紅葉のしおり周五郎
角砂糖紅茶にとかし秋の風邪
ひとり居の一人に長き秋時雨
むかご飯母の思い出話聞き

小さい秋　　山本　春英

古庭の小さい秋と対しけり
秋晴れやピアノ調律音澄みて
マンションに一畝稲架の影おとし
産地の名調べて買いし柿の秋
初時雨殺人ニュース哀しけれ

七五三　　川村　春節

木の実踏み仰げば樫の葉の揺れて
大木は歴史語らず飛騨の秋
肌寒や聞けば気になる子の話
稲架を積む空に声あり故郷に入る
七五三まいりの孫に傘とどけ